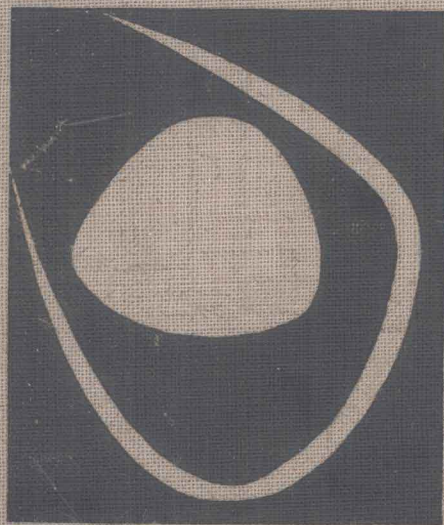






著者略歴

一九一五—一九九九年(予定)。東京
芝で生まれて神田で育ち、麻布、麴
町、巢鴨など十二ヶ所に移り、現在
は小金井に住む。旅に関する著書は
「若き日の山」「霧と星の歌」「山
のパンセ」「董色の時間」「花嫁の
越えた峠」「雲の憩う丘」「ひとり
旅」「北海道の旅」「山の独奏曲」

季節風の歌 著者・串田孫一 定価・二五〇〇円 発行・昭和四六年十二月一五日 発行者・

松田清 発行所・日本交通公社 東京都千代田区丸の内一―六―四 郵便番号一〇〇 振替・

東京二九四〇三 印刷所・新村印刷株式会社 ©串田孫一 一九七一 無断転載複製を禁ず

PRINTED IN JAPAN

49-156

0026-3401-5847

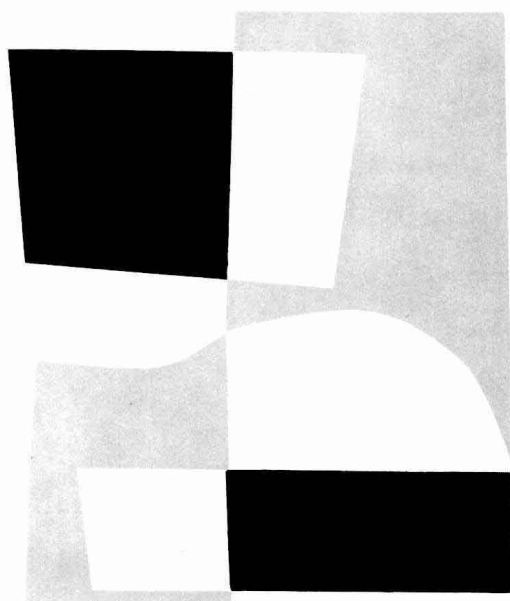
季節風の歌

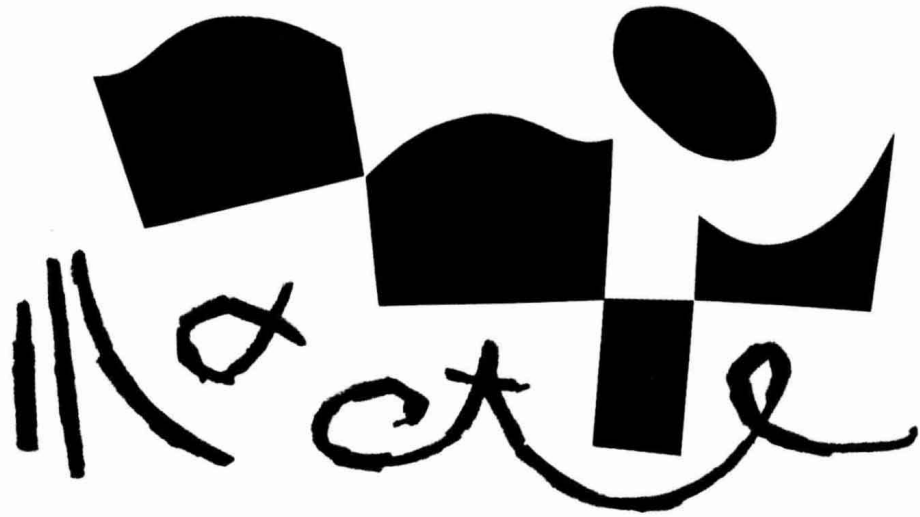
串田孫一

目次

草原と森と流れ
夕陽を眺める岬
憧れと回想の峰
丘と港のある町
董色に暮れた日
吹雪と氷の海辺
山に春の来る頃
草笛を吹いた道
準平原の里と鳥
星の流れた山旅

122 110 94 86 74 58 42 32 20 6





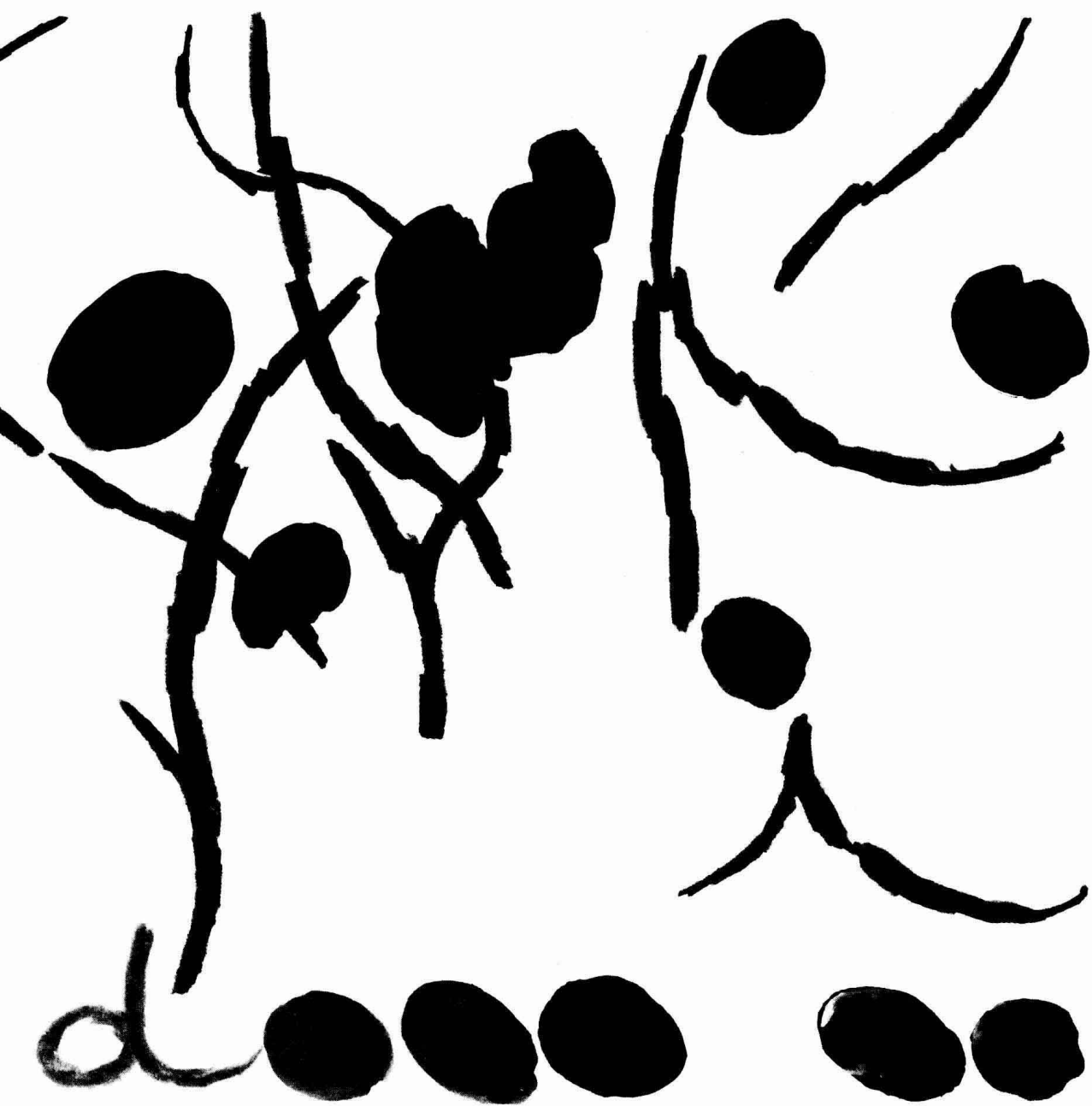
風は嬉々として雲を流し、枯葉を運ぶ。私は無益な冠毛として風を待つ。遙かな飛翔を夢みる草の種子にまじって、寂しい姿の丘を越えるだろう。華やかな夕映えに續く青鈍の夜を飛ばされながら、私は風の歌を聴きたい。

草原と森と流れ

日記 I

夕方四時近くにこの小屋に到着。氣に入ったら何日使つても一向差支えないと言ってくれたが、私の方からは、一應五日ばかり滞在させてもらうつもりだと言っておいた。もつとも私は、旅に出ると大層氣の変わりやすい人間になるから、どうなるか分らないけれど……とつけ足しておいた。それは假りに、明日にでも氣が變つて、どこかほかの土地へ移りたくなつたような時に、それが、この小屋が氣に入らなかつたからという意味でないことを豫め含んでおいてもらいたかつたためである。しかし、そんな微妙な含みまではこの小屋の持ち主には通じなかつたろう。その點では、一日幾らと借賃を取り決めてもらえたらば有難いと思つていたが、そういうわけにもゆかず、好意に押し切られた。よく強引に好意をむき出しにする人がいるが、そのために氣がねをすることになり、決して愉快ではない。まあそんなことにいつまでもこだわっているのはやめよう。寢具と炊事の簡単な道具類、それに米味噌と若干の食糧が運び込まれていた。更に、炊事が面倒な時には、ここから歩いて十五分ばかりの距離にある農家にもよく頼んであるから、決して遠慮をしないで食事をしに出かけてもらいたいと言われている。こんな工合にひと通りの親切を受けてはいるが、あとは大体のところ放っておいてもらえそう、まあこの滞在の計画もどうやらうまくゆくだろう。焚木の置場所だの、夜になつて早速使うランプと石油罐、そんなものを念のために見ておくにはほんの二、三分もあればよかつたし、もう大分前に山かげに日は沈んでいたが、とつぷり暮れるまでには、まだ幾らか間があつたので、少し近くを歩いてみた。小屋のある位置が山の中腹とか、まだ傾斜のはつきりと感じられる山麓であると、

大体眺望のきくところが必ず近くにあつて、あたりの地形はちよつと見廻しただけでつかめるものだが、ここはそうした山からは遠く、森や林がかなり不規則に點在し、また續いていたりするので、どこを歩いてみてもその範囲の容子しかつかめなかった。だがここは田園の匂いはたっぷり漂っている。その芳香は豫想していた通りはかなり複雑である。山に来て、夕暮に嗅ぐ空気の匂いともどこか違い、そうかと言って、畑のあいだの小みちで嗅ぐそれとも違っている。それはこういう場所を望んでやつて来た自分の気持も多分に手傳つているとは思ふが、落付くにつれて、原野の匂いはいいよ濃くなつた。最も簡単に食事の用意をする。小屋の中の鉄板ストーヴを使うと、同時に部屋の湿気もとれるかとは思つたが、外の空気のすがすがしさも棄て難く、小屋の脇に石を積んで造つてあつた竈を使つた。火を焚き付けた時には、青つばく煙が棚引いて、草原をゆっくり流れて行くのが見えていたが、焚き付けの細い板から太い薪へと火が移ると、あたりは闇になり、もう煙の行方などは追えなくなつた。私はその場所で食事を済ませてしまった。小屋の中へ運び込んで、ランプの灯を明るくして食べると、箸を持ち、茶碗を持つ自分の手が見え過ぎて、なんとなく工合の悪い佗しさに襲われそうに思えたからだつた。この日記を書き終えると、私は何をする事になるだろうか。何もすることがなくなつてしまうのではなからうか。ランプの芯を細めに見てみた。窓硝子にうつつていた灯と私の顔とが消えかかる。窓にはカーテンがない。雨戸もつけてない。それはこの小屋を造つた人が、案外通俗的な一面のある人で、夏の暑い季節の頃にこれを使うことだけしか考えていなかったのかも知れない。そして夏が過ぎると外側から窓には板をぶちつけてしまうのかも知れない。何か外で鳴いている。寂しい声である。灯が北の森の木の梢から見えるのだろう。

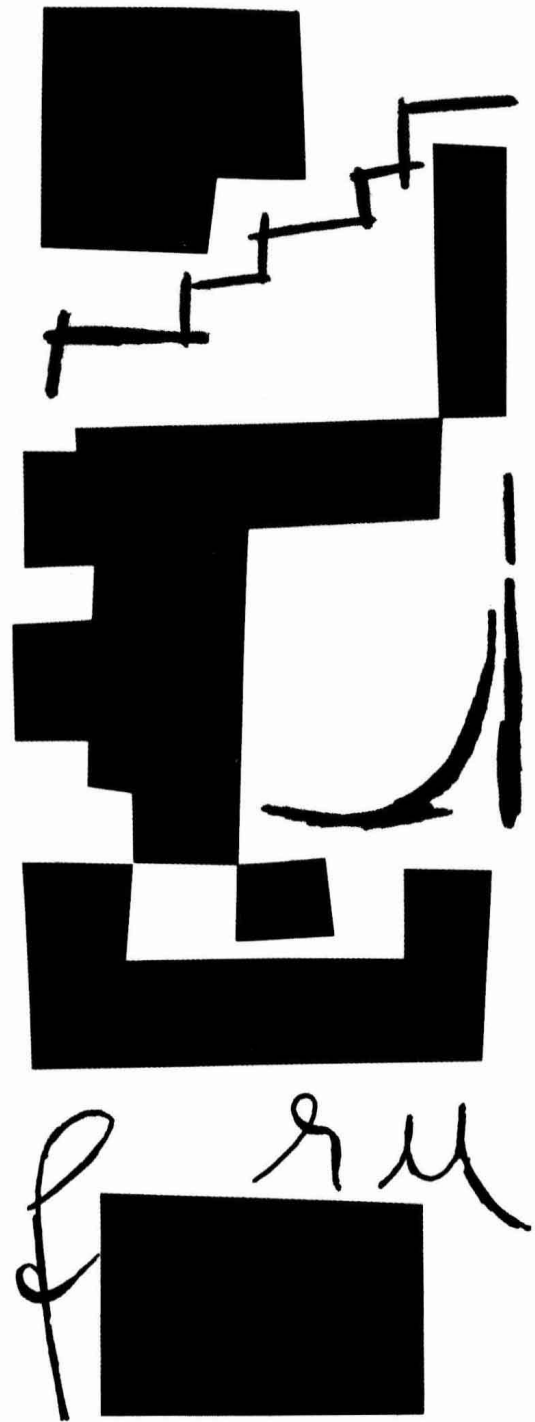




手紙 I

今、私が滞在している小屋について説明をするのは少々厄介です。まあざつと話すと、二、三度泊ったことのある古い宿屋の主人が、ある人から頼まれて十数年前に建てたものですが、建ててから三年もしないうちにその人は死んでしまい、宿の主人は遺族から、いいように処分してくれと言われたものの、折角建てたものをすぐに取り壊してしまうのも勿體ないというので、物好きなお客が来ればそこを使うようにすすめていたものです。これまで何人ぐらいの利用者があつたか知りませんが、私はその話をこの前、このあたりを旅した時に泊って聞いてから、いつか一度使わせてもらおうと思つていたのです。眺めがいいとか、どこかの山にでも登るのに便利だとか言うのならば利用者もあるでしょうが、およそ、そういう条件からははずれた小屋で、泊ってみるつもりで行つた人も、その場所を見て、大概是引き返して来るのではないでしょうか。そんな場所にある小屋です。私が、その宿の主人に、四、五日使わせてもらいたいと葉書を出すと、寝具を運び、食糧なども入れて、掃除もしてくれたものと思います。いつかあなたにも言つた筈ですが、方々を歩き廻る旅よりも、時々はなんでもないような場所に暫らく滞在したいと思つてゐる私には、まことにありがたい話でした。夏の一週間か十日ぐらいをそこで過すために、ふらふらと建ててしまった別荘を、いつでも使つてくれと言ふ知人も何人かいますけれど、そうは言われても案外使いにくいものです。第一そういう別荘は、建て方はたとえバンガロー風のものであつても、大概は場所がよすぎるのです。山に囲まれた湖を見下ろすとか、真正面に姿のいい山を望むとか、何だか満點をやらなければいけないような景色があると、どうも落付けないのです。そしてそういうところだと、近頃では自動車が入ることを絶対条件としているでしょうから、私が最ものがれたいと思つてゐる音に悩まされそうで恐ろしいのです。幸いにして私は自炊を苦にしませんし、一人で一つ的小屋を勝手に使えるというのは、なんと言つても願わ

しいことなのです。この小屋の造りですが、上等とは言えません。三、四人がいいところだと思えるぐらいの廣さはいいとして、しゃれたところがないのも見当りません。私でしたら、鉄板ストーヴは、部屋の中心に据えた方がいいと思うのですが、それが隅の方に、ただ炊事のためだけのようになら置かれています。土地の大工に任せっぱなしだったようなその造りが、すべて中途半端なのです。もつともこれを自分の小屋として造らせた人は、夏以外の季節には利用しようとは思っていなかったとすれば、これで別に不自由なことはありませんまいが、雪が多いこの辺で、冬籠りを試みようとしたら、全体に考えなおさなければなりませんまい。私はあまりいい癖ではないでしょうが、他人の家へ行くと、すぐに、自分がここに住むのだしたら、この辺はこうしよう、この飾りはよくない、そんなことをつい思いってしまうのです。それでこの小屋には満足はしていますけれど、すっかり気に入ってしまったというわけではありません。けれども、この附近の自然、大して目立つもののない自然は、大層気に入りました。自然に向って注文をつけたりすることはありませんが、それでも何となく邪魔なもの、穴があいた感じのところがあるものです。今日は、午前と夕方の二回、この附近を歩きましたが、人の姿を見かけることもなく、森の近くでは、私でも、十二、三種類の鳥の声を聴き分けることが出来ましたし、その森の向うへ突き抜けると川原に出るのです。今は穏やかな日が續いているので、川の流れは極めておとなしいのですが、川原の石の重なり方だの、流木の散らかり方などを見ると、長雨や荒天の日の、濁った水の狂い流れる容子が充分に想像できます。その川の岸辺や、林の中で見た花の名前は手帖に書きとめてありますから、お望みならばいつか詳しくお話してもいいし、また、この旅と滞在を終えてから、ゆつくりそんなことを書いて、読んでいただくかと思っています。ここには仕事などは持って来ていませんし、ここを題材にして文章を書こうという予定も立てていません。それではここからもう一度ぐらいいは手紙を書くことになるでしょうが、ともかくお元氣にお過ごし下さい。



日記 II

三日目になる。手紙を出すことと、雑貨屋で少し買ひものもしたかったので、一時間ばかり歩いて村まで出かけた。宿の主人が親切に食事のことを頼んでおいてくれた農家には、買ひものを済ませて戻るときに立ち寄った。私が一向に姿を現わさないので、今日は小屋へ行ってみようかと思っていたと、炉端に膝を揃えて坐りなおした爺さんがお茶をすすめ、早速食事の仕度をした。私はこういう田舎のしきたりを一応は心得ているつもりで、それをうまく断った。そして特別あの小屋にいてする仕事があるように思わせた方がいいと判断して、それらしいことを言うと、前の小屋の持ち主と親しかったのかとか、あの小屋を買うつもりなのかとか、そんなことを頻りに訊ねた。私は小屋を買う考えなど全然ないことを納得させてしまってから、以前の持ち主がどんな人だったかを知りたい気持ちになった。そしてその人のことをこの爺さんがよく言おうが悪く言おうが、私には何のかかわりもないだけに、



餘計そんな話をききたくなった。あと二、三日で引きあげるから心配しないでくれと言って腰をあげると、一人で淋しいだろうからこれを持って行けと、小型のラジオを佛壇のわきの棚から取ってくれた。トランジスターを覚えそこねて、トランスラジオだと言って渡された。私は勿論要らなかったが、それまでは断われなかった。この爺さんもすすめていたが、午後は散歩をしながら薇せんまいを採る。腰に吊す籠がないので、紙袋を持って行つた。小みちを辿つて川に出た。川原は明るく爽やかである。素足になつて、時々足の水をひたした。川原のわきの胡桃の木の根許に、やまかがしが二匹いた。蛇の動作はまだあまり活潑ではなく、冬眠から覚めてまだ間もない時のようであつた。この川の近い藪には蛇はいくらでもいそうであつた。夕方まで川原にいて、戻るとすぐに夕食にした。味噌汁に薇を入れた。わたを取りながら、何年か前の田舎住いを想い出した。毎日毎日、野蒜のびるに蕨、薇だけだった。今夜も六時前に外で食事を済ませた。借りたラジオのスイッチを入れた。なかなか感度がよく、アンテナをのばして方向をいろいろにかえると、四、五種類の放送が聞ける。旅に出る時に、自分からラジオを携行する気持にはなれないが、こんな小屋での滞在にはあつてもいいと思つた。ここへ来てからは、睡眠時間が多くなり、朝も早く起きてはいるが、流石に今夜は眠れない。それでしばらく迷っていたが、とうとう夜近くなつてから外へ出て、月光をたよりに歩いた。月は春らしく朧ろで色に赤味があつた。星の数も少なかったが、草原は昼とは異つた夜の植物の匂いが満ちていた。

手紙 II

一週間か十日ぐらいの旅に出ることに経験することですが、最初の二日三日は随分長く感じられ、出かけた日がなんだか十日も前だったように思われるのです。こうして一箇所に滞在していてもそれは

同じで、ここにももう一週間はいたような気持ちになっています。ところがそれから先になると、今度は日がたつのが段々速くなって来ます。何か旅先での収穫を特別に期待しているような時には、この日のたち方の速さが、かなり私を苛立たせますが、今度はそんなことは全くありません。けれども性分として、無為に過ごすことは好みませんから、後になって自分で悔まない程度のことはしておきたいと思い、今日からは朝食のあと、すぐ弁当を作って寫生に出かけることにしました。繪の具を持って来たので、三枚に一枚ぐらいは色を着けるようにして、今日は殆んど森ばかりを描いていました。森の中には一本だけかすかな道がありますが、迷い込んだら出られなくなるような深い森ではないので、そんなまぎらわしい道はあつさり捨てて、好き勝手に歩きました。この森は自然のものではありません。一部分はそうかも知れませんが、杉は植林されていて必要な時が来れば、自ら倒れる前に切られる運命にある連中です。歩いていると、切り株が幾つかありましたが、あるものは餘程古く、たつぷりと苔に蔽われていたり、またあるものは去年の秋にでも切られたようなものでした。その切り株の一つを腰かけにして、森の中の小さい空間、そこに太陽の光が射してこの地上にもこんなところがあったのかと思われるような神秘的な光の漂うところ、そこを描こうとしました。私は随分眞剣になつて描こうとするのですが、構図はともかくとして、雰囲気がうまく出せません。結局捉えられていないのでしょう。こういう時に、専門の画家は一体どうするのだろうか、どんな気分になるものだろうかと思つてみました。絵も文章と同じでその場で完成されるものではなく、その雰囲気を損わずに持ち帰ることが大事なのでしょう。ですからある時には忠実に、ある時にはおもしろいと思つた枝振りを強調し、色を着けるのにも自分の気持ちの方に従つて、赤褐色に枯れた杉の葉の色などを多く使つたりしました。これがどのような収穫の意味を持つかわかりませんが、一日たつぷりそんなことをしていたので、気分が優れて、気がつくとき口笛なんぞを吹いていました。